



コスタリカ共和国 草の根技術協力

「生活改善アプローチによる農村開発モデル事業活動報告」

No. 32

2019.4.30

～集大成～

NPO 法人イフパット 研究員 小林 沙羅
(前・現地調整員/生活改善ファシリテーター)

「生活改善アプローチに出会い、住民が決めて行動すること、学ぶことで変化が起きるとわかった。」当事業のカウンターパートの一人である保健省のエリーがそう言った表情には確信が満ちていました。

当草の根事業を実施する中で一番苦労したのは、ファシリテーターの「態度の変容」でした。「自分は農業の専門家だから農業技術を教えて、種子や肥料を配布することが仕事であり、農家の声を聞くことではない」言い切ってしまう農業改良普及員もいました。

エリーは、事業開始当初一緒に村に行き家庭訪問をしても、家の周りの汚水が溜まっているところを探しては「病気の発生源になる。早く清掃してください」と住民に指示ばかり出していました。村の衛生状況を改善し、デング熱などの発症率を減らすのが彼女の仕事であり、保健省の蚊を減らすキャンペーンなどとても真面目に取り組んで来ました。にもかかわらず毎年雨季になると相変わらずデング熱は発症し、事業実施時に流行したジカ熱にかかるグループ員もいました。エリーと一緒に活動していると「自分がこんなに指示しているのに、キャンペーンもしているのに現状が何故変わらないのか？」という疑問を漏らしていました。

そのような問題意識を持つ中、住民自身が主体となり課題解決をする生活改善アプローチの考え方を学び、村の人たちと話し合いやワークショップを重ねる中で彼女の村の人たちへの接し方は「ファシリテーター」に変わっていきました。指示や命令がなくなり、穏やかな表情で傾聴するようになり、また保健のプロフェッショナルとしての考え方を押し付けるのではなく「～についてはどう思いますか？」と提案型の話し方になりました。彼女が「住民が決めて行動し学ぶことで変化が起こる」と語りだした時、村の

人たちもまた彼女のことを「説教臭い役人」から、固有名詞で名前を呼びかけ信頼するようになる変化が見られました。

市役所の予算計画担当のジェフリーは、生活改善アプローチを理解しながらも自分の通常業務が現場に関わるものではないことから当初戸惑いを見せていました。ともかく村に行くことから始め、実際の女性たちによる改善活動を目の当たりにし、振り返りなどを担当することで、「今まで市役所の職員として、村に橋を建設するなどの仕事に関わることはあったが、実際村の人たちに会い、話を聞く機会はなかった。」と村の女性達との関わり合いにダイナミズムを感じるようになっていきました。女性たちがグループのアクションプランを作る段階で、計画官としての経験が活かせると考えジェフリーに講師を頼んだところ、集落の活動には精密すぎる行政計画のような計画策定を紹介してしまったのですが、それでも必死に女性たちに問いかけ、グループで一番大人しい女性の笑顔と発言を引き出すことが出来ました。

その頃から、対象の女性たちの態度の変化や参加状況を観察するようになり、事業終了時には村に行けない時も女性達から頻繁に相談の電話を受け寄り添いを続けるまでに至りました。グループ員の脱会などの課題に対しても「グループの初期段階は恋人同士と同じで、何もかもが楽しくバラ色に見える。しかし、グループ活動が進むと運営面でしなくてはいけないことも増え、夫婦と同じで関係性がより深くなることでぶつかることもある。今のグループは成長過程にあり、ほとぼりが冷めるまで少し放置することも必要。」というように、グループを客観的に分析しファシリテーターとして何をすべきか考えるようになりました。

参加型開発の権威ロバート・チェンバースが言う「変わるのは私たち」という、支援する側が支援される側である住民から学び、変わり、成長するというコンセプトは、理念としては理解されますが、実際に変わるまでは自分を相対化しある意味での自己否定も含み時間がかかります。当事業を通じてカウンターパート全員が変わったとは言えませんが、一人一人のファシリテーターの素質や問題意識を把握し、ファシリテーターの機微に触れる点を考えながら生活改善アプローチを導入し、常に住民との相互の学び合いを促進しながら定期的にフォローすることが「考えるファシリテーター」の成長に繋がるという示唆を、当事業実施結果から感じています。



グループの計画づくりについて説明
(オロティナ市役所、ジェフリー)



改善活動を自宅で実践した女性の発表
に立ち会う (保健省、エリー)